
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 世之助《よのすけ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) この頃 | 西鶴《さいかく》が書いた

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [# 地から2字上げ] (大正六年四月)

上

友だち 処でね、一つ承りたい事があるんだが。
世之助《よのすけ》 何だい。馬鹿に改まつて。
友だち それがさ。今日はふだんとちがつて、君が近々《きんきん》に伊豆の何とか云ふ港から船を出して、女護《によご》ヶ島《しま》へ渡らうと云ふ、その名残りの酒宴だらう。
世之助 さうさ。
友だち だから、こんな事を云ひ出すのは、何だか一座の興を殺《そ》ぐやうな気がして、太夫《たいふ》の手前も、聊《いささか》恐縮なんだがね。
世之助 そんならよせばいいぢやないか。
友だち 処が、よせないね。よせる位なら、始から云ひ出しはしない。
世之助 ぢや話すさ。
友だち それがさ、さう中々簡単には行かない訳がある。
世之助 何故？
友だち 尋《き》く方も、尋かれる方も、あんまり難有《ありがた》い事ぢやないからね。尤《もつと》も君が愈《いよいよ》いいと云へば、私も度胸を据ゑて、承る事にするが。
世之助 何だい、一体。
友だち まあさ、君は何だと思ふ。
世之助 ぢれつたい男だな。何だつて云へば。
友だち いやさう開き直られると、反《かへ》つて云ひ出しにくいがね。つまり何さ。 この頃 | 西鶴《さいかく》が書いた本で見ると、君は七つの時から女を知つて.....、
世之助 おい、おい、まさか意見をする気ぢやあるまいね。
友だち 大丈夫、叔父さんがまだ若すぎる。 そこで、六十歳の今日《こんにち》まで、三千七百四十二人の女に戯れ.....
世之助 こいつはちと手きびしいな。
友だち まあさ、三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少人《せうじん》を弄《もてあそ》んだと云ふ事だが、あれは君、ほんたうかい。
世之助 ほんたうだよ。ほんたうだが、精々《せいぜい》お手柔《てやはら》かに願ひたいな。
友だち それが、どうも私には少し真《ま》にうけられないんだね。いくら何だつて君、三千七百四十二人は多すぎるよ。
世之助 成程ね。
友だち いくら君を尊敬した上でもだよ。
世之助 ぢや勝手に割引して置くさ。 太夫《たいふ》が笑つてゐるぜ。
友だち いくら太夫が笑つてゐても、この儘《まま》にはすまされない。白状すればよし、さもなければ、
世之助 盛りつづすか。そいつは御免を蒙《かうむ》らう。何もそんなにむづかしい事ぢやない。唯、私の算盤《そろばん》が、君のと少しちがつてゐるだけなんだ。
友だち ははあ、すると一桁《ひとけた》狂つたと云ふ次第かい。
世之助 いいえ。
友だち ぢや おい、どつちがぢれつたい男だつけ。

世之助　だが君も亦、つまらない事を気にしたもんだ。

友だち　気にするつて訳ぢやないが、私だつて男だらうぢやないか。何割引くか判然しない中は首を切られても、引きさがらない。

世之助　困つた男だな。それならお名残りに一つ、私の算盤のとり方を話さうか。　　おい、加賀節はしばらく見合せだ。その祐善《すけよし》の絵のある扇をこつちへよこしてくれ。それから、誰か蠟燭《らふそく》の心《しん》を切つて貰ひたいな。

友だち　いやに大袈裟《おほげさ》だぜ　　かう静になつて見ると、何だか桜もさむいやうだ。

世之助　ぢや、始めるがね。勿論唯一例を話すだけなんだから、どうかそのつもりに願ひたい。

中

もう彼は《かれこれ》三十年ばかり昔の事だ。私が始めて、江戸へ下つた時に、たしか吉原のかへりだつたと思ふが、太鼓を二人ばかりつれて、角田川《すみだがは》の渡しを渡つた事がある。どこの渡しだつたか、それも今では覚えてゐない。どこへ行かつてもりだつたか、それももう忘れてしまつた。が、その時の容子《ようす》だけは、かう云ふ中《うち》にも、朧《おぼろ》げながら眼の前へ浮んで来る。……

何でも花曇りの午《ひる》すぎで、川すぢ一帯、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だつた。水も生ぬるさうに光つてゐれば、向う河岸《がし》の家並《やなみ》も、うつらうつら夢を見てゐるやうに思はれる。後《うしろ》をふり返ると、土手の松にまじつて、半開の桜が、べつたり泥絵具《どろゑのぐ》をなすつてゐた。その又やけに白いのが、何時《いつ》になく重くるしい。その上少し時候はづれの暖さで、体さへ動かせば、すぐじつとりと汗がにじむ。勿論さう云ふ陽気だから、水の上にも、吐息《といき》程の風さへない。

乗合は三人で、一人は国姓爺《こくせんや》の人形芝居からぬけ出して来たやうな、耳の垢《あか》取り、一人は廿七八の、眉をおとした町家《ちやうか》の女房、もう一人はその伴《とも》らしい、洩《はな》をたらしした丁稚《でつち》だつた。それが互に膝をつき合せて凡《およそ》まん中どころに蹲《うづくま》つたが、何分舟が小さいので、窮屈な事ゝ夥《おびただ》しい。そこへ又人が多すぎたせゐか、ともすれば、舷《ふなべり》が水にひたりさうになる。が、船頭は一向平気なもので、無愛想な老爺《おやぢ》の、竹の子笠をかぶつたのが、器用に右左へ棹《さ》を使ふ。おまけにその棹の雫《しづく》が、時々乗合の袖にかかるが、船頭はこれにも頓着する容子がない。　　いや、平気なのは、まだ外にもある。それは例の甘輝《かんき》字《あざな》は耳の垢とりで、怪しげな唐装束《からしやうぞく》に鳥の羽毛《はね》のついた帽子をかぶりながら、言上《ことあ》げの幟《のぼり》を肩に、獅子ヶ城の櫓《やぐら》へ上《のぼ》つたと云ふ形で、舳《みよし》の先へ陣どつたのが、船の出た時から、つけ髭《ひげ》をしごいては、しきりに鼻唄をうたつてゐる。眉のうすい、うけ唇《くち》の、高慢な顔を、仔細らしくしゃくりながら、「さん谷《や》土手下にぬしのない子がすててんある」と、そそののだから、これには私ばかりか、太鼓たちも聊《いささか》たじろいだらしい。

「唐人の『すててん節』は、はじめてでげす。」

一人が、扇をぱちつかせながら、情ない声を出して、かう云つた。すると、それが聞えたのだらう。私と向ひあつてゐた女房が、ちよいと耳の垢とりの方を見ると、すぐその眼を私にかへして、鉄漿《かね》をつけた歯を見せながら、愛想よく微笑した。黒い、つやつやした歯が、ちらりと唇を洩れたかと思ふと、右の頬にあさく靨《ゑくぼ》が出来る。唇には紅がぬつてあるらしい。　　それを見ると、私は妙にへどもどして、悪い事でも見つけられた時のやうな、一種の羞恥《しうち》に襲はれてしまつた。

が、かう云つたばかりでは、唐突すぎる。曰《いは》くは、この舟へ乗つたそもそもからあつたのだから。

と云ふのは、最初、土手を下りて、あぶなつかしい杭《くひ》を力に、やつと舟へ乗つたと思ふと、足のふみどころが悪かつたので、舷《ふなべり》が水をあほると同時に、大きく一つぐらりとゆれる。その拍子に、伽羅《きやら》の油のにほひが、ぶんと私の鼻を打つた。舟の中に、女がある　その位な事は、土手の上から川を見下した時に、知つてゐた。が、唯女があると云ふだけで、（廓《くるわ》のかへりではあるし）それが格別痛切にさう思つてゐた訳でも何でもない。だから、伽羅の油のにほひを嗅《か》ぐと、私は、まづ意外な感じがした。さうしてその意外の感じの後《あと》には、すぐに一種の刺戟を感じた。

唯にほひだからと云つても、決して馬鹿にしたものではない。少くとも私にとつては、大抵な事が妙に嗅覚と関係を持つてゐる。早い話が子供の時の心もちだ。手習《てならひ》に行くと、よくいたづらつ子にいちめられる。それも、師匠に云ひつけられ、後《あと》の祟《たた》り《たたり》が恐ろしい。そこで、涙をのみこんで、一生懸命に又、草紙《さうし》をよごしに行く。さう云ふ時のさびしい、たよりのない心もちは、成人《おとな》になるにつれて、忘れてしまふ。或は思ひ出さうとしても、容易に思ひ出し悪《にく》い。それが腐つた灰墨《はひずみ》のにほひを嗅《か》ぐと、何時でも私には、そんな心もちががへつて来る。さうして、子供の時の喜びと悲しみとが、もう一度私を甘やかしてくれる。　　が、これは余事だ。私は唯、伽羅の油のにほひが、急にこの女房の方へ、私の注意を持つて行つた事さへ話せばよい。

さて、気がついて、相手を見ると、黒羽二重《くろはぶたへ》の小袖に裾取《すそとり》の紅《もみ》うらをやさしく出した、小肥《こぶと》りな女だつた。が、唐織寄縞《からおりよせじま》の帯を前でむすんだ所と云

ひ、投島田《なげしまだ》に平元結《ひらもとゆひ》をかけて対《つゐ》のさし櫛《ぐし》をした所と云ひ、素人《しろうと》とは思はれない位な、なまめかしさだ。顔はあの西鶴《さいかく》の、「当世の顔はすこしまろく、色はうすはな桜にて」と云ふやつだが、「面道具《おもてだうぐ》の四《よ》つ不足なく揃ひて」はちと覺束《おぼつか》ない。白粉《おしろい》にかくれてはあるが、雀斑《そばかす》も少々ある。口もとや鼻つきも、稍《やや》下品だつた。が、幸《さいはひ》生際《はえぎは》がいいので、さう云ふ難も、大して目に立たない。私はまだ残つてゐた昨夜《ゆうべ》の酔が、急にさめたやうな心もちがして、その女の側へ腰を下した。その下した時に又、曰くがある。

曰くといふのは、私の膝が、先方の膝にさはつたのだ。私は卵色 | 縮緬《ちりめん》の小袖を着てゐる。下は多分肌着に、隠し緋無垢《ひむく》だつたらう。それでも、私には、向ふの膝がわかつた。着物を着た膝ではない。体の膝がわかつたのだ。柔《やはらか》な円みの上に、かすかなくぼみが、うすく膚膩《あぶら》をためてゐる。その膝がわかつたのだ。

私は、膝と膝とを合せたまま、太鼓を相手に気のない冗談を云ひながら、何かを待設けるやうな心もちで、ちつと身動きもしないでゐた。勿論その間も、伽羅の油のにほひと、京おしろいのにほひとは、絶えず私の鼻を襲つて来る。そこへ、少したつ中には、今度は向ふの体温が、こちらの膝へ伝はつて来た。それを感じた時のむづ痒《がゆ》いやうな一種の戦慄《せんりつ》は、到底形容する語《ことば》がない。私は唯、それを私自身の動作に翻訳する事が出来るだけだ。私は、眼を軽くつぶりながら、鼻の穴を大きくして、深くゆるやかな呼吸をした。それで君に、すべてを察して貰ふより外はない。

が、さう云ふ感覚的な心もちは、すぐにもう少し智的な欲望をよび起した。先方も私と同じ心もちでゐるだらうか。同じ感覚的な快さを感じてゐるだらうか。それはかう云ふ疑問だつた。そこで私は、顔をあげて、わざと、平氣を装ひながら、ちつと向ふの顔を見た。が、そのつけやきばの平氣は、すぐに裏切られるやうな運命を持つてゐた。何故かと云ふと、相手の女房は、その稍《やや》汗ばんだ、顔の筋肉のゆるみ方と、吸ふものをさがしてゐるやうな、かすかな唇のふるへ方とで、私の疑問を明かに肯定してくれたから、さうして、その上に、私自身の心もちを知つてゐて、その知つてゐる事に、或満足を感じてゐる事さへも、わからせてくれたから

私は聊《いささ》か恐縮しながら、てれがくしに太鼓の方をふりむいた。

「唐人の『すててん節』は始《はじめ》てでげず。」

太鼓がかう云つたのは、丁度その時だつた。耳の垢とりの鼻唄を笑つた女房と、私が思はず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然でない。が、その羞恥は、当時、女房に対して感じた羞恥のやうな気がしてゐたが、後《あと》になつて考へて見ると、実は女房以外の人間に対して感じた羞恥だつた。いや、さう云つては、まだ語弊がある。人間がさう云ふ場合、一切の他人（この場合なら、女房も入れて）に対して感じる羞恥だつた。これは当時の私が、さう云ふ羞恥を感じながら、女房に対しては、次第により大胆になれたのも、わかりはしないだらうか。

私は全身のあらゆる感覚を出来る丈鋭くしながら、香《かう》を品《ひん》する人のやうな態度で、相手の女房を「鑑賞した。」これは私が殆《ほとんど》すべての女に対してする事だから、大方君にも以前に話した事があるだらう。私は稍汗ばんだ女の顔の皮膚と、その皮膚の放散するにほひとを味《あぢは》つた。それから、感覚と感情との微妙な交錯《かうさく》に反応する、みづみづしい眼の使ひを味つた。それから、血色のいい頬の上で、かすかに動いてゐる睫毛《まつげ》の影を味つた。それから、膝へのせた手の、うるほひのある、しなやかな、指のくみ方を味つた。それから、膝と腰とにわたる、むつちりした、弾力のある、ゆたかな肉づきを味つた。それから、かう話して行けば、際限がないから、やめにするが、兎に角私はその女房の体を、あらゆる点から味つた。敢て、あらゆる点と云つても、差支へはない。私は感官の力の足りない所を、想像の働きで補つた。或は、その上に又、推理の裏打さへも施した。私の視覚、聴覚、嗅覚、触覚、温覚、圧覚、どれ一つとして、この女房が満足させてくれなかつたものはない。いや実に、それ以上のものにさへ満足を与へてくれた

。.....

「忘れものをおしでないよ。」

それから、かう云ふ声を聞いた。さうしてそれと同時に、今まで見えなかつた、女の細い喉が見えた。その蓮葉《はすは》な、鼻にかかつた声と、白粉の少しむらになつた、肉のうすい喉とが、私に幾分の刺戟を与へるのは云ふまでもない。が、それよりも寧《むしろ》、私を動かしたのは、丁稚《でつち》の方へふりむいた時の動作が、私の膝へ伝へてくれる、相手の膝の動き方であつた。私は前に、向ふの膝がわかつたと云つた。が、今はそれだけではない。向ふの膝のすべてが、それをつくつてゐる筋肉と関節とが、九年母《くねんぼ》の実と核《たね》とを舌の先にさぐるやうに、一つ一つ私には感じられた。黒羽二重の小袖は、私にとつてないにひとしかつたと云つても、過言ではない。これは、すぐ次に起つた最後の曰《いは》くを知つたなら、君も認めない訳には行かないだらう。

やがて、舟は棧橋《さんばし》についた。舳《みよし》がとんと杭《くひ》にあたると、耳の垢とりは、一番に向ふへとび上る。その途端に私は、わざと舟のあほりを食べたやうに装つて、（乗る時にも、さうだつたので、これは至極自然に見えるだらうと思つてゐた。）よろけながら、手を舷《ふなべり》の上にある女房の手にか

けた。さうして、太鼓に腰を支えられながら「これは失礼」と声をかけた。君はその時、私がどんな心もちだったと思ふ？ 私は、この接触から来る可也《かなり》強い刺戟を予想してゐた。恐らく私の今までの経験は、最後の仕上げを受ける事だらうとさへも思つてゐた。が、この予想は見事に、外《はず》れてしまつたのではない。私は勿論、滑《なめらか》な、寧《むしろ》つめたい皮膚の手ざはりと、柔かい、しかも力のある筋肉の抵抗とを感じた。しかし、それらは、結局今までの経験の反復にすぎない。同じ刺戟は、回数と共に力を減じて来る。ましてこの時は予想が大きい。私は索漠とした心もちで、静に私の手をはなさなければならなかつた。もし私の今までの経験が、完全にこの女房の体を鑑賞したのでなかつたなら、かう云ふ失望はどうして、説明する事が出来るだらう。私はこの女を、感覚的に知りつくした。どうしても、かう考へるより外はない。

これは、またかう云ふ事から考へて見ても、わかるだらう。それは私が昨日《きのふ》なじんだ吉原の太夫と、今の女房とを、私の心もちの上でくらべて見るとする。成程一人は一夜中《いちやぢゆう》一しよに語りあかした。一人は僅《わづか》の時間だけ、一つ舟に乗つてゐたのに過ぎない。が、その差別は、膚下一寸《ふかいつすん》でなくなつてしまふ。どちらが私に、より多く満足を与へたか、それは殆どわからない。従つて、私が持つて居る愛惜も（もしさう云ふものがあるとすれば）全く同じやうなものである。私は右の耳に江戸清搔《えどすがが》きの音《ね》を聞き、左の耳に角田川《すみだがは》の水の音を聞いてゐるやうな心もちがした。さうしてそれが両方とも、同じ調子を出してゐるやうな心もちがした。

これは、私には兎も角も発見だつた。が、総じて、発見位、人間をさみしくするものはない。私は花曇りの下を、丁稚を伴《とも》につれて、その眉のあとの青い女房が、「ぬきあし中《なか》びねりのあるきかた」で、耳の垢とりの後《うしろ》から、棧橋を渡るのを見た時には、何とも云へずさびしかつた。勿論惚れた訳でもない。唯向うでも大体私と同じやうな心もちでゐたと云ふ事は、私のさはつた手を動かさずにゐたのでも、わかるだらう。……

なに吉原の太夫？ 太夫はまるでそれと反対な、小さい、人形のやうな、女だつた。

下

世之助 まづざつと、こんなものだつた。そこで、それ以来、その女のやうなものを関係した中へ勘定したから、合せて男女《なんによ》四千四百六十七人に戯れた事になると云ふ次第さ。

友だち 成程、さう聞けば尤もらしい。だが……

世之助 だが、何だい。

友だち だが、物騒《ぶつさう》な話ぢやないか。さうなると、女房や娘はうつかり外へも出されない訳だからね。

世之助 物騒でも、それがほんたうなのだから、仕方がない。

友だち して見ると、今にお上から、男女同席御法度《なんによどうせきごはつと》の御布令《おふれ》でも出かねなからう。

世之助 この頃のやうぢや、その中に出るかも知れないね。が、出る時分には、私はもう女護《によご》ヶ島《しま》へ行つてゐる。

友だち 羨《うらやま》せるぜ。

世之助 なに女護ヶ島へ行つたつて、ここにゐたつて、大してかはりはしない。

友だち 今の算盤《そろばん》のとりにすれば、さうだらう。

世之助 どうせ何でも泡沫夢幻《はうまつむげん》だからね。さあ改めて、加賀節でも承らう。

[# 地から2字上げ] (大正六年四月)

底本：「現代日本文学大系 43 芥川龍之介集」筑摩書房

1968 (昭和43) 年8月25日初版第1刷発行

底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」(区点番号5-86)を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：柳沢成雄

1998年10月11日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。